

ほめはどのようなコンテキストで現れているか

— 日中の初対面会話におけるほめの出現パターン —

昂燕妮（名古屋大学大学院生）

要 旨

本研究では、日本語と中国語の初対面会話をもとに、ほめがどのようなコンテキストで何をきっかけに行われているかを手がかりに、ほめの出現パターンを明らかにし、日中の言語文化による異同を分析した。まず、ほめが行われるに至るまでの会話のやりとりを質的に分析した結果、ほめの出現パターンとして、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」の6つが観察された。また、これらの各パターンの出現頻度について、日中の間に有意差は見られなかった。全体的な特徴として、日中の初対面会話におけるほめの8割以上は、「価値見出し型」と「同調型」であり、日中の母語話者はともに、初対面相手から得た情報を相手へのほめに結びつけて、良好な対人関係を構築しようとしている傾向にあることが窺われた。

【キーワード】 ほめ コンテキスト 出現パターン 日中対照 初対面会話

1. はじめに

ほめは相手を心地よく感じさせる言語行動であるが、ただほめればいいわけではなく、タイミングの把握が重要であることは言うまでもない。適切な場面でほめを行えるかどうかは、円滑なコミュニケーションができるかどうかに関わり、対人関係の構築にも影響を与えている（山路 2004）。

ほめがいつ行われるかは、その背景となる社会文化の影響を受け、話者の有する一般常識や社会通念が参照される（筒井 2012）。そのため、異文化コミュニケーションにおいては、社会文化の相違が原因で、ほめを行うタイミングを間違えたり、ほめが期待される場面で適切にほめることができなかつたりするようなケースが起きやすいと思われる。こうしたコミュニケーション上の課題を解決するには、ほめがどのような状況で行われるのか、言語文化によってどのような相違があるかを解明する必要がある。そこで、本研究では、異文化理解に資する有益な知見を得るために、日本語と中国語の初対面会話におけるほめが現れるコンテキストに着目して、対照分析を行う。

2. 先行研究と本研究の課題

これまでのほめに関する研究は、主にほめの方法・対象・機能・返答などをめぐっ

て行われてきた。日中のほめに関しては、これらの観点からいくつかの相違が指摘されている。例えば、昂（2022）は日中の会話を対照分析し、中国語では、多様なほめの方法（直接評価／事実根拠の提示／他者との比較／羨望・好感などの感情表明／価値観の明示など）を同時に使って相手に働きかける傾向が日本語より強いと指摘している。また、関崎他（2017）はほめの対象に着目し、日中韓3か国の大学生が親友に対してどのような事柄をほめやすいかを調査した結果、「本人特有性因子」（本人特有の突出した技能、才能）に関しては3か国に大きな差がなく、「対人関係性因子」（対人関係維持に関わる特性）に関しては韓国と中国が日本より強く、「所有物属性因子」（所有物や相手に属する物事）に関しては中国が日本と韓国に比べて強いという。

ほめは、何の背景もなくいきなり行われるものではなく、前の文脈や発話の状況を受けて現れる場合が多いと思われる。しかし、ほめに関するほとんどの研究は、ほめ行動自体のみに着目しており、会話におけるほめが行われる前のやりとりに関する分析はまだ少なく、管見の限り、熊取谷（1989）、金（2012）、王（2020）のみである。

熊取谷（1989）は、談話における「ほめ-応答」の発話連鎖を「本連鎖」とし、その前後のやりとりをそれぞれ「先行連鎖」「後続連鎖」と呼び、「先行連鎖」についてはほめの対象を談話に導入する機能を持っているという。この指摘を踏まえ、金（2012）はほめの談話の流れを「先行連鎖-本連鎖-後続連鎖」とし、日韓の大学生友人同士のほめの談話構造を比較分析している。そのうち、「先行連鎖」とは「本連鎖の前に、ほめと何らかの関連のある実質的発話から始まるやりとり」（金 2012 p.200）である。また、金（2012）は日韓のほめの談話がいかに始まるかに着目し、「先行連鎖」の有無を分析した結果、日本語では、ほめ手が関連話題を導入してからほめを行い、または相手から導入された話題を相手へのほめにつなげることが多いのに対して、韓国語では話題導入のプロセスなしでほめる傾向がより強いことを明らかにしている。金（2012）はさらに、「先行連鎖」で用いられるほめに関連する話題を導入する戦略として、日韓ともに、ほめ手による「質問や確認」と、受け手による「情報提供」が最も多かったと指摘している。その後、王（2020）は、金（2012）の枠組みを援用し、日中のほめの談話構造を対照分析している。「先行連鎖」については、日中ともにほめの対象に関連する話題を導入してからほめる傾向にあり、その際に「質問・確認」、「情報提供」などの戦略が多用されるという。

このように、ほめは何らかの会話のプロセスを経て行われることが多く、また、そのプロセスには、言語や文化によって異なりうる。こうしたほめを行うまでの手続きの相違は、コミュニケーションにおける異文化摩擦の原因になる可能性がある（筒井2012）。そのため、ほめがどのようなコンテキストで行われるかを、異文化対照の観点から分析する必要があると思われる。しかし、上述の先行研究が注目しているのはほめの談話構造であり、ほめの前に現れる発話要素の分類と出現頻度は調査されてい

るが、これらの発話要素がほめといかに関連しており、なぜここでほめが発話されたかという、ほめが行われるコンテキストについては分析されていない。つまり、会話中に「ほめが行われた」ということの背景に、その時の状況や会話の内容などが影響しており、何らかの脈絡があると思われるが、会話におけるほめがどのようなプロセスを経て、何をきっかけに発話されているかについては、まだ解明されていない。

そこで、本研究では、日本語と中国語の会話におけるほめが出現するまでのプロセスに注目して、会話におけるほめがどのようなコンテキストで行われているか（課題1）、日中の言語文化による相違があるか（課題2）を明らかにする。

3. 研究方法

本研究では、日中の母語場面の初対面会話をもとに分析を行う。初対面会話を対象にしたのは、相手を知る最も初期の段階であり、相手に関する情報がゼロの中から相互理解を深め、情報を共有してほめに結びつけるプロセスを観察できるためである。会話の収録は、2020年8月～2021年3月に、オンライン会議システムZoomを使用して実施した。会話収録時は、協力者の①言語（日本語母語話者24名、日本語学習経験のない中国語母語話者24名）、②年齢（20代）、③人間関係（同年齢または同学年の初対面同士）、④性別（同性同士）を条件統制し、日本語と中国語のデータを各12組収録した（表1）¹⁾。また、完全に自由な会話ではほめが現れにくいいため、調査時は協力者に「簡単な自己紹介/简单的自我介绍」「趣味、好きなこと/兴趣爱好, 喜欢做的事」「頑張っていたこと/努力做过的事情」「最近あった良いことや面白いこと/最近遇的趣事或开心事」の4つのトピック²⁾を用意し、話したいものについて話してもらい、会話を自由に展開してよいとした。

当事者がお互いの言語行動をどのように認識しているかを把握するために、会話収録後の当日に、協力者を対象に個別にフォローアップインタビュー（以下、FUI）を行った。FUIでは、協力者に会話の録画を見せ、「自分がほめた」と「相手にほめられた」と思うところで調査者に声をかけるよう頼み、その時感じたこと・考えたことを聞いた。会話とFUIの全過程は録音・録画をし、宇佐美（2019）を参考に書き起こした³⁾。

ほめは当事者の心理に大いに関与しており、言語表現からお世辞・社交辞令などと線引きできず、客観的に認定するのは困難である（伊藤 2011）。そこで、本研究では、ある言語行動がほめであるかどうかの判断を当事者に委ねることとする。具体的には、FUIに基づき、会話参与者双方ともに「ほめである」と認識している言語行動だけをほめとして認定する。また、本データにおけるほめの出現数（日：46例、中：48例）とその分布は表1の示す通りである。

以下では、「どのようなコンテキストで、何をきっかけに当該のほめの発話が述べられているか」という観点から、これらのほめに至るまでの会話展開のプロセスに注目

して分析を行う⁴⁾。4.1では、会話の詳細な質的分析を行ったうえで、ほめの出現パターンを抽出するとともに、各パターンの特徴を述べる。4.2では、抽出したほめの出現パターンについて、量的な分析を行い、日中の言語文化による相違の有無を検討する。

表1 各会話におけるほめの出現数

会話番号	会話参与者	ほめの出現数	会話番号	会話参与者	ほめの出現数		
日本語母語話者・女性 同士ペア	JW1	J01 J03	0	中国語母語話者・女性 同士ペア	CW1	C01 C03	4
	JW2	J02 J04	5		CW2	C02 C04	7
	JW3	J05 J07	8		CW3	C05 C08	8
	JW4	J06 J08	0		CW4	C06 C07	5
	JW5	J09 J11	8		CW5	C09 C12	0
	JW6	J10 J12	6		CW6	C10 C11	4
日本語母語話者・男性 同士ペア	JM1	J13 J16	8	中国語母語話者・男性 同士ペア	CM1	C13 C15	8
	JM2	J14 J15	0		CM2	C14 C16	0
	JM3	J17 J19	3		CM3	C17 C19	1
	JM4	J18 J20	3		CM4	C18 C20	9
	JM5	J22 J24	0		CM5	C22 C24	0
	JM6	J21 J23	5		CM6	C21 C23	2
合計		46	合計		48		

4. 分析結果

4.1 日中の初対面会話におけるほめの出現パターン

ほめの出現パターンについて分析を行った結果、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」の6つが観察された。以下では、会話例をあげながら、これらのパターンの特徴を具体的に述べる。

4.1.1 「同調型」のほめ

まず、「同調型」のほめは、ほめが行われる前のやりとりに、受け手の肯定的な自己評価が含まれており、ほめ手がそれに同調してほめる場合である（図1）。

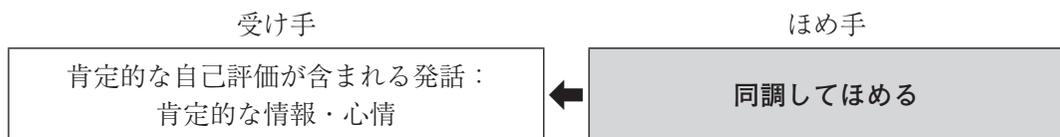


図1 「同調型」のほめ⁵⁾

例1⁶⁾ 〈JW6〉「同調型」のほめ

66 J10 なんか楽しんでるみたいなの、頑張っているって言われると、なんか受験勉強とか、マラソンとか、そこらへんになっちゃいますね。

67 J12 えっ、マラソンしました？。

68 J10 マラソンがずっと嫌いで<一緒に笑う>、運動音痴なんで、すごいずっと最下位走ってたんですけど、(うん) 高校ぐらいの時、女の子はやっぱり、ちょっとさぼり気味っていうか、ちょっとマラソンしんどいなになってくるんじゃないですか？。

-
- 69 J12 うん、はい。
-
- 70 J10 そこで、それを利用して、なんかマラソンで一位を取ろうみたいな感じで毎日頑張って、体力付けて一位を取って<笑い>。
-
- 71 J12 えーすごい<笑い>。
-
- 72 J10 <笑いながら>頑張ったなって。
-
- 73 J12 えらいな、えらいね、私もう全然マラソン、結構そういう運動好きだけど(はい)、運動得意というわけではない<笑い>。
-

例1の71行目と73行目でほめが観察された。71行目のほめに関して、会話を遡ってみると、それが行われたきっかけは70行目の発話であることがわかった。つまり、70行目のJ10の「マラソンで一位を取ろうみたいな感じで毎日頑張って、体力付けて一位を取って」という肯定的な情報開示に対して、J12は同調して「えーすごい」とほめている。続いて、72行目でJ10はまた「頑張ったなって」と肯定的な心情を開示している。それを受けて、J12は再び同調して「えらいな、えらいね」とほめている。

例1における2つのほめは、受け手の肯定的な情報・心情の開示に対して、ほめ手が同調して評価を行う「同調型」のほめである。このような肯定的な情報・心情の開示は、単なる事態の報告とは異なり、話し手自身の自己評価も含まれている。こうした場合のほめは、相手と調子を合わせて共感を構築することにつながると思われる。

また、伊藤(2012)によると、先行する発話に相手の肯定的な自己評価がすでに述べられている場合、ほめを行うのはある程度当たり前であり、むしろほめないのは相手の肯定的な自己評価を認めないことになる可能性がある。このように、受け手が肯定的な自己評価を述べている場合、ほめ手には、それに同調してほめることがある程度期待されていると言えよう。

4.1.2 「回復型」のほめ

次に、「回復型」のほめについて説明する。前述の「同調型」のほめは相手の肯定的な自己評価に同調する行動であるのに対して、「回復型」はその反対側の、否定的な自己評価に対するほめであり、相手の気持ちを回復させるために行う行動である(図2)。

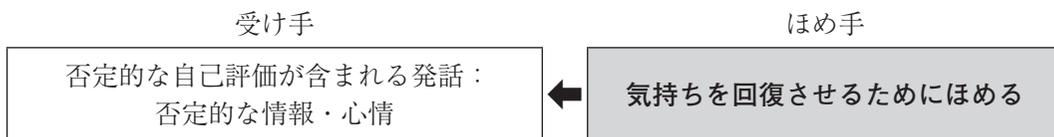


図2 「回復型」のほめ

例2 〈JM6〉「回復型」のほめ

-
- 46 J21 こういうと驚かれるかもしれないですけど、私、あの大学の内容というのを、実は自分のやりたいこととはかけ離れていて、さらに自分のやりたい内容を重視しすぎたが上に、大方留年するとこだったんですよ。
-

47	J23	<笑い>そうなんですか。
48	J21	はい、1年生の後期に、その後期に取ってた20何単位を丸々落としたぐらいで。 (…中略…) [学年と専攻に関する情報交換のやりとり]
55	J23	その具体的に何をその当時打ち込んでらっしゃったんですか？。
56	J21	あのですね、当時というか、今もそうなんですけど、私はずっと生き物の研究がしたいんですよ、で昔ながらの図鑑とかに載ってるような、そのどこまで行ってとか、どういう食べ物を食べていてとか、そういう生き物を純粋に研究したいんですけど、農学ってこういう生き物がいたら畑が良くなるよねとか、そういうことしかししない、まあ、応用の方面の研究をやって、僕はそういうところがすごく嫌で、。
57	J23	[領きながら] うーん。
58	J21	で、自分の研究をやって、お金も引っ張ってきて、その民間の助成金とかを取って、自分でごちゃごちゃ研究してたんですけど、研究研究研究ってなっていて、単位は取れないという状態になってしまった。
→ 59	J23	なるほど、いや、でも、すごいですね、すごいと思いますよ、そこからね、あの、まあ、本当にその研究をしたい、それだけこく、まあ、専門的に勉強したいからこそやっぱ博士まで進まれるんですよね。
60	J21	はい、もちろん。

例2の55行目までに、J21は大学の専門にあまり興味がなく、自分の研究を重視しすぎて単位が取れなかったという否定的な情報を開示している。それを聞いたJ23は、55行目で「その具体的に何をその当時打ち込んでらっしゃったんですか」と、詳しい情報説明を要求している。そこでJ21は56行目と58行目で、自分の興味と大学の専攻の内容の相違を説明してから、「ごちゃごちゃ研究してたんですけど、研究研究研究ってなっていて、単位は取れないという状態になってしまった」と、否定的な情報をより詳しく述べている。この情報を聞いたJ23は59行目で、「いや、でも」と否定をしてから、「すごいですね、すごいと思いますよ」とほめることで、相手の気持ちを回復させようとし、さらに、「本当にその研究をしたい」「専門的に勉強したいからこそやっぱ博士まで進まれるんですよね」(J21はこれ以前の他のトピックで博士号を取る目標があると言っていた)と、J21の気持ちに対する理解を示している。このように、J21は相手の否定的な情報開示に耳を傾け、詳しい情報を把握したうえで、ほめることで相手の発話にある否定的な側面を埋めようとし、相手の気持ちや感情に配慮していることが窺われた。

山路(2004)は、ほめは「マイナスを埋める」機能を持っており、相手の感情の中にあるマイナス要素を埋めるために行うことがあると指摘している。Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論で考えると、自分に関する否定的な情報開示は、自分のフェイスを侵害する行為であり、また、ほめは典型的な相手のフェイスを充足させる行為の1つである。このように、相手の否定的な自己評価の表明に対するほめは、相手の発話におけるマイナス要素を埋め、侵害されたフェイスを充足させ、気持ちを回復させる効果があると考えられる。

4.1.3 「価値見出し型」のほめ

「価値見出し型」のほめは、相手の中立的な自己評価の発話、または自己評価の含まれない発話から、ほめに値する事柄を見出してほめる場合を指す（図3）。

ここまで分析してきた「同調型」と「回復型」は、相手の肯定的または否定的な自己評価が含まれる発話がきっかけで行われるほめであるのに対して、「価値見出し型」のほめの場合は、相手の自己評価が述べられておらず、または中立的に述べられている点に特徴がある。つまり、ほめ手は相手の発話からほめに値する事柄を発見し、価値を見出してほめていると考えられる。

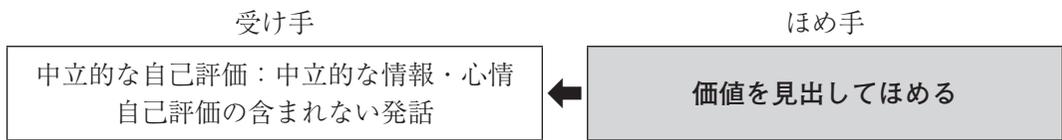


図3 「価値見出し型」のほめ

例3 〈JW2〉「価値見出し型」のほめ

-
- 39 J04 えー、どんな研究しているか聞いても大丈夫ですか？。
-
- 40 J02 あっ、全然大丈夫です、私はカンボジアのことやってるんですけど、教育専攻なので、えっと、カンボジアの小学生は留年制度あるんですよ、カンボジアって。
-
- 41 J04 すごいですね、厳しーい。
-
- 42 J02 <笑い>そうなんですよ、なんか、そういうふうな留年制度が、ヨーロッパのほうだと主流なんですけど、その植民地、ヨーロッパの植民地になってた国、東南アジアの国で結構そのまま留年制度とか、教育制度とかをそのまま持ってきてるので、留年とかがあって、留年しちゃう子たちがたくさんいるんですけど、その子たちが何で、何の要因で留年しちゃってるんだらうって研究しています。
-
- 43 J04 へえー、面白い研究ですね、<一緒に笑う>植民地だといってるんですね。
-
- 44 J02 そうですそうですそうです、っていうのをやってるんですけど、ちょっと今年コロナの影響でフィールドワーク行けなくなっちゃって。
-
- 45 J04 そうですよ、特に海外とか行けないですよ。
-
- 46 J02 そうなんですよね、だから、だから、何だろう、世界機関が出してるデータとかを借りて、それで研究するみたいな方針になっちゃって、ちょっと、つまらないというのはあれなんですけど、やれることがすごく制限されてる感じなんですよね。
-
- 47 J04 そうですよ。
-
- 48 J02 そうです。
-
- 49 J04 確かに、あっ、なんかコロナの影響を間近に受けていらっしやる、<まさに>{<}
-

例3において、J04は39行目でJ02の研究内容について質問をしており、J02から具体的な説明を聞いた後、43行目で「へえー、面白い研究ですね」とほめている。40行目と42行目のJ02の説明には自己評価が含まれていないが、J04が相手から得た情報が評価すべきものと判断して「面白い」とほめていると解釈できる。

また、このような相手から得た情報に対する肯定評価は、さらなる興味や関心を抱いていることを示し、会話の展開を促進する効果を持つとされている（筒井 2012）。

例3において、43行目のほめが行われた後、J02はコロナの影響を受けて研究でできることが制限されているという新しい情報を提供し、会話をさらに展開している。J04も積極的に共感を示している。その後の44行目～49行目では「そうですよね」「そうです」「確かに」などの同意し合うやりとりが交わされ、円滑な会話が展開されている。

4.1.4 「説得型」のほめ

本研究では、ほめ手はすでに相手をほめていたが、それが相手に受け入れられなかったため、相手がほめを受け入れてくれるように働きかけ、再度ほめる場合を「説得型」とする（図4）。

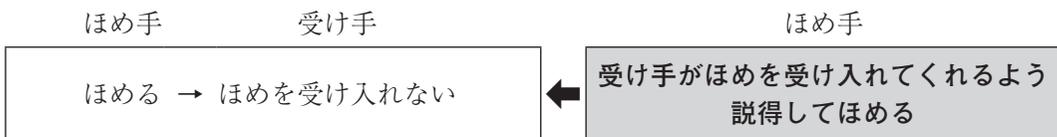


図4 「説得型」のほめ

例4 〈CW4〉「説得型」のほめ

24 C07 其实我那时候没想考研，就看大家都考，我就考<笑>，后来也不记得自己有多努力，就每天按部就班做一些事情，完成自己定的一个计划，就这样一步一步地过来了，也没有遇到心态崩溃的时候，每天都乐呵呵地跟大家一起（啊），就这样慢慢过来了，所以我觉得我也算努力吧，但没有像别人那样…。〔実はその時、大学院に入りたいとか思ってなくて、周りの人が院の入試の勉強を頑張っているのを見て、私も受けてみただけです<笑い>、と言っても一生懸命勉強していたのではなく、毎日計画通りにやっているだけで、なんかこう一歩ずつやってきて、メンタルがやられたこともなく、毎日みんなと同じように勉強していて（あ）、こうして少しずつやってきました、頑張ったと言ったら頑張ったんですけど、周りの人のように一生懸命やっているのとはちょっと違って…。〕

25 C06 我觉得你很厉害啊，就很多人就是打着一定要考，一定要考上的心思去考（〔点头〕），结果没考上，然后你就是这种，就是本来没想考，试一试就成功的这种，这就说明实力在那放着呢<笑>。〔とてもすごいと思いますよ、合格しなきゃ、受からなきゃと思っていても落ちてしまう人が多いから（〔頷き〕）、逆にやってみただけで合格できたのは、ちゃんと実力があるからですよ<笑い>。〕

26 C07 没有没有，可能是运气吧，因为我是倒数第二个进来的，你看这运气大不大。〔いえいえ、運が良かっただけ、下から2番目の成績で入ったので、すごくラッキーですよ。〕

→ 27 C06 那也需要努力，不然可能就下去了，所以，还是因为实力在那<笑>。〔それでも努力は欠かせません、じゃないと落ちてしまう可能性があるし、なので、やはりちゃんと実力があるからだと思います<笑い>。〕

28 C07 [点头] 嗯嗯。〔〔頷きながら〕 うんうん。〕

例4の会話参加者は、同じ研究科の大学院生である。例4の25行目（「同調型」）と27行目（「説得型」）で、ほめが2例観察された。まず、C07は24行目で、自分はいあまり苦勞せずに大学院に進学できたという肯定的な情報を提供している。この情報を聞いたC06は25行目で、「とてもすごい」「やってみただけで合格できたのは、ちゃんと実力があるから」と、同調してほめを行っている。そのほめに対してC07は、

26行目で「いえいえ」と不同意を示し、「運が良かっただけ」「すごくラッキー」と、合格したことを幸運のおかげにしている。続いて、C06は27行目で、「それでも努力は欠かせません」「やはりちゃんと実力があるからだ」と、ほめを受け入れなかったC07を説得しようとし、もう一度ほめを行っている。その説得を受けて、C07は28行目で同意を示した。

このように、27行目のほめが行われるきっかけは、26行目の受け手の非受容的な応答であると思われる。つまり、ほめ手は、受け手を説得するために27行目のほめを発話したと考えられる。ほめ手は、こうした「説得型」のほめを通して、「本当にいいと思う、本当にほめたい」という肯定評価の意図を強調し、相手がほめを受け入れてくれるように働きかけていると思われる。

4.1.5 「お返し型」のほめ

本研究では、相手からほめまたは肯定評価を与えられた場合や、何らかの恩恵を受けた場合において、そのお返しとして行われるほめを「お返し型」とする（図5）。

張（2014 p.100）は、「ほめは相手に利益を与える行為と同様の性質を持っている」という。また、金（2012 p.222）は、相手にほめられることは「ある意味、相手からことばのプレゼントをもらったので、そのお返しをしなければならなくなる」としている。「お返し型」のほめを通して、「自分のみが高く評価された/自分のみが利益を受けた」という不均衡を防ぎ、相手と均衡な立場を保持することが可能であろう。

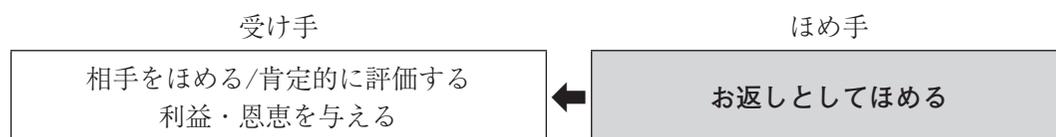


図5 「お返し型」のほめ

例5 (CM1) 「お返し型」のほめ

- 70 C15 那你有没有打算读个博士啥的？[これからは博士に進学する予定ありますか？]
- 71 C13 目前正在考虑，我想应该是要读吧，因为我想去教大学，教大学的话，就必须博士毕业。[まだ考えているけど、たぶん進学するかもしれません、大学で教えたいので、博士課程を卒業しなければなりません。]
- 72 C15 我感觉你们这种，读研究生的，读博士的都特别厉害。[なんかあなたみたいな、修士課程、博士課程まで行く人は本当にすごいと思います。]
- 73 C13 其实也没啥，真没啥，你要是读了你就知道了<笑>。[いやたいしたことないですよ、本当、あなたも大学院に進学すればわかると思います<笑い>。]
- 74 C15 但在别人看来就是很厉害嘛。[でも、他の人から見ればすごいですよ。]
- 75 C13 嗯，对，你看你哥是医生，你又是飞行员，这都是多好的职业啊。[うん、そうですね、あなただって、お兄さんは医者で、あなたはパイロット、どれも立派な仕事ですよ。]
- 76 C15 嗯，我姐姐现在也工作了。[うん、姉ももう就職しています。]

例5の70行目までに、C13とC15はお互いの職業と家族について話していた。例5の72行目（「価値見出し型」）、74行目（「説得型」）、75行目（「お返し型」）で、ほめが3例観察された。まず、71行目のC13の発話に、自己評価が含まれていないが、C15はほめに値する側面を見出して、大学院で学んでいるC13を「修士課程、博士課程まで行く人は本当にすごい」とほめている。それに対してC13は「たいしたことないんですよ」と不同意を示している。そこで、C15は74行目で、ほめを受け入れてくれるよう「でも、他の人から見ればすごいんですよ」と説得しようとし、再度ほめている。それを受けたC13は75行目で「うん、そうですね」とほめを受け入れてから、「あなただって、お兄さんは医者で、あなたはパイロット、どれも立派な仕事ですよ」と、C15と家族の仕事をほめ返している。このように、75行目のC13によるほめは、ほめてくれたC15へ的一种のお返しとして捉えられる。

4.1.6 「話者導入型」のほめ

最後に、「話者導入型」について説明する。これまで分析してきた5つのパターンはいずれも、相手の発話に対する反応としてほめる場合である。それに対して、「話者導入型」のほめは、直前の相手の発話がきっかけで現れるものではなく、ほめ手が自発的にほめの対象を会話に導入してほめに結びつけることに特徴がある（図6）。

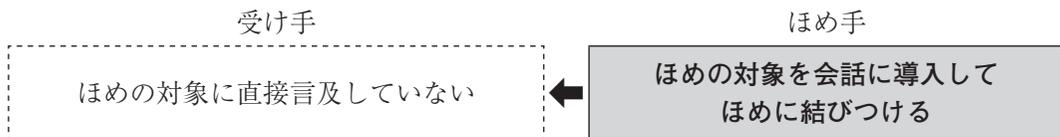


図6 「話者導入型」のほめ

例6 〈CW4〉「話者導入型」のほめ

42	C07	你的兴趣爱好是什么呀?。[何か趣味はありますか?。]
43	C06	我的兴趣爱好,, [私の趣味,,]
44	C07	是化妆吗?。[メイクですか?。]
45	C06	<笑> 那倒不是, 我的<兴趣是>{<} 【。[<笑い>いや違います、私の<趣味は>{<} 【。]
→ 46	C07	】<我觉得>{>} 你化的挺好的, 今天。[】<私は>{>}メイクがとても似合っていると思います、今日の。]
47	C06	没有, 我只是涂了个口红<笑>。[いやいや、リップを塗っただけです<笑い>。]

例6の42行目で、C07はC06の趣味について聞いているが、C06の回答を待たずに44行目で「メイクですか」と、メイクに関する話を導入している。それに対してC06が「いや違います」と否定し、「私の趣味は」と答えようとする時に、C07は話に割り込んで「メイクがとても似合っている」とほめている。

このように、例6において、ほめの対象となるのはC06のメイクであるが、46行

目のほめが行われる前に、C06が自分からメイクについて言及していない。言い換えると、例6におけるほめは、ほめの受け手の話に対する反応ではなく、ほめ手が自らほめの対象を会話に導入してほめに結びつけたのだと思われる。こうした「話者導入型」のほめは、ほめの対象に関する話題を会話に導入する機能を持ち、相手を喜ばせて人間関係の距離を縮める効果を有していると思われる。

ここまで、日中の初対面会話におけるほめが現れるコンテキストについて分析し、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」という6つのパターンと、それぞれの特徴を述べてきた。まとめて言うと、日常のコミュニケーションにおけるほめは様々なきっかけで現れており、受け手からの肯定的・否定的・中立的な情報や心情の開示に対して行うものもあれば、ほめを受け入れなかった受け手に対する説得、または受け手からのほめや肯定評価などに対するお返しとして述べられるものもあり、さらに、ほめ手が自発的にほめの対象を会話に導入してほめに結びつける場合もある。

また、各パターンのほめがもたらす効果に着目すると、相手の肯定的な自己評価に対して行う「同調型」のほめは、相手と調子を合わせて共感を構築することにつながる。「回復型」のほめは相手の感情におけるマイナス要素を埋め、気持ちを回復させる効果を持っている。また、相手から得た中立的な情報から価値を見出して高く評価する「価値見出し型」のほめは、価値付けることで相手を喜ばせ、会話の展開を促進する効果があると考えられる。「説得型」のほめは、「本当にいいと思う、本当にほめたい」という評価の意図を強調し、相手がほめを受け入れてくれるように働きかけるものである。なお、ほめてくれた相手に対して「お返し型」のほめを行うことは、相手との均衡な立場の保持につながる。さらに、相手に関する既存情報をもとに、ほめる対象を自ら会話に導入してほめに結びつける「話者導入型」のほめは、話題導入の機能を持つと同時に、相手との人間関係の距離を縮めることに役立つと思われる。

このように、対人コミュニケーションにおけるほめは、行われるきっかけやコンテキストによって、多様な役割を果たしている。さらに、各パターンのほめの出現プロセスは異なるものの、その背後には、円滑なコミュニケーションと良好な対人関係を構築するという、共通の役割があると言えよう。

4.2 ほめの出現パターンに関する日中対照

前述のように、どのようなコンテキストでほめを行うかは、言語文化の影響を受ける。以下では、本データにおける各出現パターンの数を表2に示し、日中の言語文化による相違の有無を検討する。表2の結果についてFisherの正確確率検定を行ったところ、日本語と中国語の間で、各パターンの出現数に有意差はなかった ($p>.05$)。

表2 日中の初対面会話における各出現パターンの数

	同調型	回復型	価値見出し型	説得型	お返し型	話者導入型	合計
日本語	17 (37.0%)	2 (4.3%)	24 (52.2%)	1 (2.2%)	2 (4.3%)	0 (0.0%)	46
中国語	16 (33.3%)	2 (4.2%)	23 (47.9%)	2 (4.2%)	2 (4.2%)	3 (6.3%)	48

表2が示すように、日中ともに、「価値見出し型」のほめが最も多かった。日本語と中国語の初対面会話におけるほめの約半分は、相手の「自己評価が述べられておらず、または中立的に述べられている」発話から、ほめに値する部分を見出して高く評価するものであった。また、前述したように、このような相手から得た情報に対するほめは、さらなる興味や関心を抱いていることを示し、会話の展開を促進する効果を持っている。したがって、ここから、日中の初対面会話におけるほめ手は、ほめを通して相手と円滑なコミュニケーションを構築しようとしていることが観察された。

また、日中ともに、2番目に多かったのは「同調型」のほめであった。ほめは高い評価を与える行為であるが、受け手の個人領域に踏み込むリスクを持っている。受け手に好まれないほめは、逆に不愉快の原因になってしまう。一方で、「同調型」のほめの場合、受け手自身の発話にすでに肯定的な自己評価が含まれており、ほめがある程度期待されていると言える。ゆえに、こうした場合において、ほめ手にとっては、ほめを行いやすいと思われる。「同調型」のほめの出現頻度が比較的高かったのは、それが一因ではないかと思われる。

さらに、両言語ともに、「回復型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」のほめの数は少なかった。まず、「回復型」のほめは、否定的な自己評価をしている相手の気持ちを回復させるために行うものであり、その数が少なかったのは、初対面の相手に否定的な自己評価を述べるケースがもともと少ない⁷⁾ためではないかと思われる。また、「説得型」のほめが少なかったのは、相手に関する情報把握がほとんどないため、説得のしようがなく、または強引な説得で相手の不愉快を招くのを回避しているためだと推察される。さらに、初対面会話においては、話者間の相互理解が足りないため、ほめてくれた相手をほめ返す（「お返し型」）ことや、自発的に相手に関する事柄を会話に導入してほめる（「話者導入型」）ケースが起きにくいと思われる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日中の初対面会話におけるほめがどのようなコンテキストで行われているか（課題1）、日中の言語文化による相違があるか（課題2）を明らかにした。課題1に関しては、ほめが現れるに至るまでの会話のやりとりを質的に分析した結果、「同調型」「回復型」「価値見出し型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」という6つの出現パターンが観察された。課題2に関しては、各パターンの出現頻度について分析した結果、日中ともに、「価値見出し型」と「同調型」のほめが全体の8割以上を

占めていた。この2パターンのほめはともに、話し手が受け手から得た情報に基づき、受け手を高く評価するものである。ここから、日中の母語話者はともに、初対面の相手から得た情報を相手へのほめに結びつけて、良好な対人関係を構築しようとしている傾向にあることが窺われた。また、日中ともに、話者間の相互理解の欠如や初対面という場面の制約などの原因で、「回復型」「説得型」「お返し型」「話者導入型」の4つのパターンのほめの数が少なかった。

次に、本研究から得られる日本語教育への示唆について述べる。前述したように、ほめは相手と共感を構築したり、相手の気持ちを回復させたり、相手を喜ばせたりするなど、会話を円滑に進め、良好な対人関係を築く上で多様な役割を果たしている。これらのほめの効果を発揮するには、適切なコンテキストでほめることが重要である。しかし、会話参与者双方が異なる文化的背景を持つ接触場面では、「ほめる気があっても、いつほめればいいのかわからない」と戸惑ってしまうことが多いと思われる。本研究では、ほめが何をきっかけにどのようなコンテキストで述べられているか、対人コミュニケーションにおいてどのような役割を果たしているかを明らかにすることができた。これは、日本語の会話教育に示唆を与えるものであると考える。具体的には、本研究で明らかになったほめを行うコンテキストの図式（図1～図6）を取り上げ、各パターンのきっかけと対人的効果を説明し、日本語学習者に「いつほめればいいのか」というほめるタイミングを提示することが可能であろう。

さらに、本研究の結果は、日中間の異文化コミュニケーションに示唆を与えるものである。本研究で観察したところ、日中ともに、初対面会話における8割以上のほめは、「価値見出し型」と「同調型」であった。この結果から、日中の初対面の場面において、相手の話に耳を傾け、言及された情報からほめに値する側面を積極的に見出して高く評価したり、会話に含まれる相手の肯定的な自己評価を汲み取ってほめたりすることは、会話にほめを導入する主な方法であると言える。中国人日本語学習者だけでなく、日本語母語話者にとっても、これらのほめの導入方法を把握することは、ほめを通して初対面の相手との対人関係の距離を縮め、より良い異文化コミュニケーションの構築に寄与すると考えられる。

最後に、今後の課題として、以下の3点があげられる。相手に関する情報把握がほとんどない初対面の場合、そこで現れるほめ行動の背景には、会話の場で得た情報を処理して、ほめに結びつけるプロセスが伴っており、ほめ手の価値観が働いていると思われる。今後の1つ目の課題は、会話の内容に注目し、こうした情報共有からほめに至るまでのプロセスに反映されている価値観を明らかにすることである。

また、ほめがどのように現れているかは、それに対する受け手の反応に影響を与えていると思われる。例えば「同調型」のほめにおいて、受け手がすでに自分のことを肯定的に評価しているため、ほめられた後の反応には、ほめを受け入れるケースが多

いかと予想される。また、受け手を説得するために行われる「説得型」のほめに関して、受け手は説得されたかどうか興味深いことである。2つ目の課題は、ほめが行われるコンテキストとそれに対する受け手の反応の関係性を明らかにすることである。

3つ目の課題は、多様な場面におけるほめのパターンを解明することである。本研究が扱うのは、日中の母語話者同士による母語場面の初対面会話であり、今後は、日中の友人同士の会話と、日中接触場面の会話におけるほめの出現パターンについても分析したい。さらに、本研究の初対面会話では、話題指定をある程度してあるものの、自由会話・雑談の特徴が強いと思われる。一方で、依頼・交渉・勧誘・援助要請などの相手に働きかける目的の会話においては、相手をほめることが目的の達成につながり、本研究の初対面自由会話の6つのパターンで収まらないケースがあると予想される。今後は、こうした目的達成型の会話におけるほめについても分析したい。

注

- 1) 調査時は、対象者の出身地・居住地が特定の地域に偏らないように配慮した。会話収録時の協力者の身分に関しては、日本語母語話者の場合は社会人10名と大学(院)生14名であり、中国語母語話者の場合は社会人11名と大学(院)生13名である。また、研究のための会話データの使用について、協力者全員の承諾を得ている。
- 2) 本研究では、予備調査の段階で、筆者の内省と先行研究の調査、及び日中の母語話者に対する「どのような状況なら相手をほめるか」のインタビューの結果を踏まえ、10個ほどのトピックを用意していた。その後、複数回予備調査を行ってから、話しやすさと話す時間などを総合的に考え、4つのトピックを選び、本調査のトピックとした。
- 3) 文字化の記号：日本語の読点 中国語の読点 未完結文 1発話文の終わり
疑問文 言い淀み 短いあいづち 文脈情報 協力者の個人情報
笑いの説明 同時発話の重ねられた発話 同時発話の重ねた方の発話
前の発話が完結する前(II)に次の話者の発話(II)が始まった
- 4) ほめが現れるかどうかは、トピックの影響を受けられると思われるが、調査時に「会話は自由に展開してよい」と伝えたので、協力者は必ずしも筆者が用意したトピック通りに話すとは限らず、自己紹介してから自由会話となったケースが多かった。また、調査時に用意したトピックを話せばほめが必ず現れるわけではない。つまり、本研究の分析の焦点はほめの出現に直接つながるきっかけと具体的な会話のコンテキストであり、会話のトピックよりミクロなレベルのものであると思われる。
- 5) 図1～図6において、で囲っている部分はほめが行われるきっかけとなる言語行動であり、➡は先行の言語行動がきっかけで後続のほめが行われていることを示す。また、 (網掛け)で囲っている部分は、そのコンテキストで、各パターンのほめが行われていることを示す。 (破線)で囲っている部分は実際にはなされていない

い言語行動であり、→は言語行動の現れる順番を示す。

- 6) 会話例の左から、注目すべき発話「→」、ライン番号、発話者、発話内容を示す。また、中国語の例の訳 ([] で示す) は、筆者によるものである。
- 7) こうしたケースが少なかった一因として、相手に否定的な自己評価を述べることは、相手からの励ましや慰めを求める側面を持っており、親密度の低い初対面の相手にとって、何らかのリアクションをとらないといけないという、負担を感じさせやすいことがあげられる。

参考文献

- 昂燕妮 (2022) 「日本語と中国語の『ほめ』の方法の対照研究—親疎関係に着目して—」『日本語／日本語教育研究』13、105-120
- 伊藤由希子 (2011) 「『ほめ』とはどのような言語行動か—コミュニケーション主体の意識に沿ったとらえ直しを目指して—」『待遇コミュニケーション研究』8、1-16
- 伊藤由希子 (2012) 「相手に伝わる『ほめ』の条件—『すごい』の受け止められ方がかりに—」『待遇コミュニケーション研究』9、1-16
- 宇佐美まゆみ (2019) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2019年改訂版」<https://isplad.jp/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>
- 王欣 (2020) 『日本語と中国語の褒めの言語行動の対照研究—談話展開の観点から—』九州大学博士論文
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語のほめに関する対照研究』ひつじ書房
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2、97-108
- 関崎博紀・金庚芬・趙海城 (2017) 「ほめの対象に働く価値観の日韓中比較—大学生へのアンケート調査の結果に対する因子分析を通して—」『社会言語科学』20 (1)、161-175
- 張承姫 (2014) 「相互行為としてのほめとほめの応答—聞き手の焦点ずらしの応答に注目して—」『社会言語科学』17 (1)、98-113
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 山路奈保子 (2004) 「日本語の談話における『ほめ』の機能」『比較社会文化研究』15、109-118
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.